

# Thomas Aquinas の Aristoteles 著 Metaphysica の解釈について

大 鹿 一 正

## I

Thomas は Expositio in Met. Arist. で Aristoteles の Metaphysica<sup>(1)</sup> の A—M に亘る逐語的註釈を行っている。ところで、Aristoteles の Metaphysica は、その名の示す如く自然学の領域に含まれなかった所謂形而上学的な論文の後人による編輯として成立したところから、当然乍ら、内容的に一貫性を欠き、従って、各巻の叙述の整合性について種々解釈上の難点が生じ、その一つとして主題に関する問題がある。すなわち、Met. A<sub>2</sub> は、求むる学として第一原理を探求する学を提起し、それが神的な学であることを説き、Met. Γ<sub>1</sub>、E<sub>1</sub> に至<sup>(2)</sup>っては、存在である限りの存在、所謂 *ὄν ἢ ἔν*<sup>(3)</sup> を考察する学が主張される。Met. E<sub>1</sub> は更に、永遠にして不動なる離在的実体の存在を予想し、それに関わる学が第一哲学でありまた神学とも呼ばるべきものであるとし、次いで、不動の離在的実体に関わるこの学が、第一であることから普遍的でもあり、よって *ὄν ἢ ἔν* をも考察すると述べてこれらを統合せんとしている。<sup>(4)</sup> 然し、P. Natorp のいうごとく、神という特殊なる存在に関わるべき神学と、存在一般の普遍的な学たるべき *ὄν ἢ ἔν* の学とは相容るべくもなく、この二つの学の主題の関係について Aristoteles の真意をただすことは Metaphysica 解釈の一つの課題となっている。そして、後に、W. Jaeger の新しい方法による解釈が出て Aristoteles 研究は大きく前進したが、この問題は、むしろ一層複雑となり、その後も種々新しい解釈が夫々の立場から発表されているが、未だ最後の

な解決を見ていない。<sup>(7)</sup> 然るに、いま、Thomas にあっては、*Metaphysica* 成立の歴史は知らず、Aristoteles 自らになる一つの書として対しているわけであるが、それだけになお、意識するとしないに拘わらずこの問題との対決とその解答とが見らるべく、それはこの *Metaphysica* 解釈の立場と共に、また彼自身の *metaphysica* 観をも開示することが期待される。以下、この点を中心として Thomas の解釈を検討することにしたい。

## II

Thomas は *Expositio in Met.* の Prooemium において、ここに探究される学の性格内容の輪郭を与えているが、その場合、それを *Metaphysica* の内容から抽象概括するという仕方ですることなく、むしろ外から、すなわち、始めに普遍的な原理に基づいて他の諸学を支配すべき最高の学 *sapientia* を要請し、次いで概念的分析によってその内容を規定し、最後に当の *Metaphysica* がそれらの内容をもつところの学に他ならぬことを結論するという論法がとられている。われわれはここに先ず、Thomas が最初から完全なる最高の学を *Metaphysica* に期待していることを窺うことが出来るが、更にその内容とするところを見れば大体以下の如くである。

あらゆる学や技術的知識は人間の幸福の為のものとして一つの秩序の中におかれてある。然るに、一つの秩序の中にある以上は、その中の一つが最も支配的な学として他のすべてを支配するのではなくてはならず、それは *sapientia* と呼ばれるものである。ところで *sapientia* は他のあらゆる学術を支配するのであるから、最も知的な学であり、従って最も知的なものに関わるのではなくてはならぬ。ここにおいて、最も知的なものは三様に解される。(1) 第一原因。けだし、知識の確實性は原因の把握によって獲得される。知識に確實性を与えるものはより多く知的であると思われ、ゆえに、第一原因は最も知的なものと思われる。(2) 普遍的存在 *ens commune*。けだし、感覚は個別を認識し知性は普遍を認識する。ゆえに、凡そ知的な

ものは普遍的であり、従って、最も普遍的な原理が最も知的である。かかる最も普遍的な原理としては、存在、一と多、可能態と現実態等があげられる。(3) 離在的実体。けだし、すべて事物は質料から離れてあることによって知的である。ゆえに、最も多く質料から離れているものが最も知的であり、それは、観念的にのみならず存在的にも感覺的質料から離れているところの、神とか知性実体の如きものである。

さて、これら三つのものは等しく一つの学としての *sapientia* によって考察されるものとなる。というのは、或る類を考察することとその類に固有な原理を考察することとは同一の学に属すべきことであり、いま、普遍的存在が類であり、離在的実体はその共通的且つ普遍的な原因であると考えられるから。ゆえにまた、この三者を同列に主題として考察するのではなく、主題とするのは普遍的存在であり、離在的実体はその主題の第一原因としてのみ考察される。けだし、学の主題とは、その原因や状態が探究されるものであり、探究されるその原因そのものは主題ではない。そして更に、この普遍的存在もまた離在的なものといわれることができ、従って、この *sapientia* は全体として離在的なものに関わる学であるといわれうる。かくして、この学は、離在的実体、すなわち神の実体にかかわるところから *theologia* と呼ばれ、普遍的存在にかかわるところから *Metaphysica* の名をもち(けだし、より普遍的なるものはより後なるものである)、第一原因を考察するところから *prima philosophia* と呼ばれるのである、と。

かくして、*Metaphysica* は、結局、普遍的存在を主題とし、離在的実体とその共通的且つ普遍的なる第一原因として考察する学であると規定されたことになるが、これは、問題の神学と *θεολογία* の学とを異なる次元におくことによって一つに総合したものと見ることが出来るが、その総合の論拠たる、離在的実体が *ens commune* の共通的且つ普遍的な原因である。というのは、始めに見た *Aristoteles* の統合の論理と同様に、如何なる意

味において語られているのであるかは判明でなく、また、その *ens commune* も離在的であるということは、*Metaphysica* をそのまま全体として神学であると解しているのかという点についても、以上からは断定出来ず、更に Thomas の *intentio* を確かめねばならない。然るに、これらの疑問に関しては *Expositio in Met.* には、Thomas のこれ以上の説明は見られず、——それが *Metaphysica* の逐語的註釈という制約によるものと解されるならば、それだけ一層この *Prooemium* の見解は Thomas の自由な解釈としてその独自性を示すものというべきであるが、——われわれはこれを他に求めなくてはならぬ。

### III

Thomas は *In librum Boethii de Trinitate expositio* においては、Boethius の *De Trinitate* を対象としながらも極めて自由な形で論を展開しているが、その *Ques. 5* において、Aristoteles の学の区分に倣って、理論的な学の区分及び性格について考察し、*Art. 4* では神学をとりあげその規定を行っているが、この中において、哲学者のいうところの *metaphysica* がそのまま神学者のいう *divina scientia* となる所以の論理が展開されているのを見ることができる。われわれは、次に、これによって Thomas の *Metaphysica* 解釈における *intentio* を見たいと思う。

すなわち、或る類を主題として考察する学は、その類の原理をも考察して始めて学として完成するが、凡そ原理には、(1)それ自体が完全なる存在者であり、同時にまた他のものの原理でもあるもの、例えば天体の如きものと、(2)それ自体は完全なる存在者ではなく、ただ諸々の存在者の原理としてのみあるもの、例えば数における一、線における点、自然物の形相と質料など、の二種類がある。そして、(1)の原理は、或る学において主題の原理として考察されるのみならず、またそれ自体が一つの学の主題として考察されるものともなる。これに対して(2)の原理は、それを原理とする

ところの事物を主題とする学において、それらの原理としてのみ考察されるものである。

ところで、凡そ如何なる類にあっても、その類を構成するすべてのものに働きを及ぼす或る共通の原理が存するものであるが、存在するものであるという点で共通する全存在にも全存在に共通する原理が存する。然るに、Avicennaによれば、共通の原理は二様に語られることのできるものであり、一つは述語性によって共通なる原理であり、一つは、因果性によって共通なる原理である。前者は、凡ゆる個別的形相は等しく形相であると述語づけられるところから形相であることがそれらすべてに共通であるといわれる如くであり、後者は、数的に一なる太陽が凡ゆる生成するものの原理としてすべてに共通であるといわれる如くである、と解される。いま、全存在に共通する原理にもこの両様のものがあり、前者によるものは、Met. A<sub>4, 5</sub>に述べられているが如き、類比によって同一なる原理であり、後者の如き共通原理としては、凡ゆる存在者の存在の原理 principium essendiなるものが考えられる。然るに、凡ゆるものの存在の原理たるものは最高度の存在者 maxime ensでなくてはならぬ。そして更に、最高度の存在者たるものは、当然、最も完全なるものであり、また、純粹なる現実態であるべく、従ってそれは非質料的且つ不動なるものとして神的なるものでなくてはならぬ。ところで、かかる神的なるものは、全存在の原理であると同時に、明らかに、それ自体として完全なる存在者である。従ってそれは、上述の論理から、学において、全存在の存在の共通原理として考察されると共にそれ自体が一箇の事物として学の主題となり得るものである。ゆえに、神的なるものを考察する学は二つあり、一つは、神的なるものを学の主題としてではなく、存在一般という主題の原理として取扱う学であり、一つは、神的なるもの自体を学の主題として考察するものである。そして、この前者は哲学者が研究し metaphysica と呼ばれるものに他ならず、後者は聖書の中に説かれているところのものがこれである。

また、更に、哲学者が *metaphysica* において主題として取扱うところの普遍的存在、*ens*, *substantia*, *potentia*, *actus* 等も、或る意味においては質料と運動から離れたもの *separata* といわれうる。すなわち、観念的にではなく、存在的に質料と運動から離れてあるということは二様の意味で語られる。(1) 一つは、質料と運動から離れてあるということがそのものの本性に属することとしてある場合で、神及び天使の如く、質料と運動の中に存在することの決してないものについて語られ、(2) 一つは、質料と運動の中に存することがそのものの本性に属することとしてはない場合で、質料と運動の中に見られることもあるが、質料と運動から離れて存することもありうるものについて語られる。けだし、質料と運動から離れて存し得るものは、質料と運動の中に見られるとしても、それに依存して始めて存在するものではないと考えられる。そして *ens*, *substantia*, *potentia*, *actus* 等、所謂 *ens commune* がそれである。(これに対して、他の諸事物は、決して質料と運動から離れて存することのありえないもの、いわば、質料と運動の中に存することがそのものの本性に属するものといわれよう。) ゆえに、*metaphysica* は(2)の意味の *separata* を主題とし、(1)の意味の *separata* をその原理として考察し、聖書の神学といわれるものは、(1)の意味の *separata* を主題として考察するものということが出来る。ところで、存在的に、質料と運動から離れてあるところのものを考察するということが神学を自然学及び数学から分つ Aristoteles の規準であり、そして、Thomas もここから、この Art. 4 において神学を規定するのに、神学は、質料と運動から離れて存するところのものに関わるか、ということ考察の課題としているのであるが、ここにおいて、*metaphysica* は単に原理として神的なるものを考察するという点においてのみならず、全体的に質料と運動から離れたものを考察する学となり、神学の条件を充たすことになるものである。そして Thomas はこれを、聖書の神学 *theologia sacrae Scripturae* に対して、哲学的神学 *theologia philosophica* と呼んでいる。

以上において、さきの *Expositio in Met.* の *Prooemium* における *Thomas* の *intentio* は自ら明らかとなるであろう。すなわち、離在的実体が普遍的存在の共通的且つ普遍的な原理であるというのは、存在一般の *principium essendi* としての *maxime ens* を考えているに他ならない。そして、離在的であるといわれた、普遍的存在を主題とし、離在的実体を原理とする *sapientia* すなわち *Metaphysica* は、そのまま *theologia philosophica* となるのである。ゆえに、次の問題は、かかる解釈が *Aristoteles* の *Metaphysica* において如何にして可能であるかということである。然るに、いま、*ens commune* を或る意味で離在的であるとするのは、勿論 *Aristoteles* の説くところではないが、むしろ附帯的な形式にかかわるものであり、その本質的な内容を変ずるものではないと思われる。ゆえに問題は、第一原理たる離在的実体が、最高度の存在者として全存在の共通的且つ普遍的な原理である、という点にある。というのは、*Met. E<sub>1</sub>* でその存在が予想されて神学が樹てられたところの、運動からも質料からも離れてあるものとは、一般に、*Metaphysica* の *text* においては、永遠の円運動をなす諸天体を動かすところの不動の第一動者であると解されるから。そしてそれは、運動の秩序においては、当然、第一の原理であり、また或る意味においてはその秩序に属するすべてのものの共通の原理であるだろうが、それが直ちに、存在の秩序において、*ens commune* の共通的且つ普遍的原理としての *maxime ens* となるのは些か論理の飛躍があるのではないかと思われる。ゆえに *Thomas* のこの論理が、如何にして *Metaphysica* のうちにおいて見出だされるかが次に検討されねばならない。

#### IV

上に見た如く、*Thomas* はこれを共通原理の二様性の論理から導き出しているが、その時に、この共通原理の二様性の論理に関して *Avicenna* を引用し、更にその例証を *Metaphysica* に求めているのであり、われわれ

はここにこの問題の解明の方向が示されているのを見ることが出来る。すなわち、Met. 4<sub>4, 6</sub> には、感覺的諸事物の原理が如何なるものであり、幾つあり、それらが如何なる意味において同一であるといわれ、また如何なる意味で異なるものかが論ぜられているが、これが Avicenna の論理の原型と見られる。それによれば、一般に原理や原因は、個々の異なるものにおいては夫々異なるものであり、ただ、普遍的に、また類比的に語られる場合にはすべてにおいて同一である。そして、実体はすべてのものの原因であるとか、実体の原因は四つであるとかいわれるのはかかる意味においてである。けだし、個々のものの様態或いは運動の原因は、個々の夫々相異なる実体であり、また個々の実体の原因は、夫々相異なる形相や質料であるから、と述べられ、最後に、然し、なお、かかる原因の他に、すべてのものの中の第一なるもの、究極的なるものとしてすべてのものを動かすものがあることをつけ加えて、運動因の系列の第一のものたる不動の第一動者をそれにあてているのである。

ところで、Avicenna においては、この二様性が、共通的なることの二様性として、共に作動因と目的因との因果系列において語られている。すなわち、一つの仕方では、作動因の因果系列の最初のもの、第一作動因が、その系列に属するあらゆるものに共通なる作動因といわれ、また、あらゆるものがそれを志向するところの究極の目的が、それらすべてに共通なる目的といわれる如くであり、他の仕方では、個々の事物の作動因においてそれらが作動因であることが共通的であり、また、個々の事物の夫々の目的が共通的に目的であるといわれる如くである。それゆえ、前者の共通的なるものは、存在的に一なるものが多くのものに共通的であるが、後者にあつては、観念的にのみ一なるもの、すなわち *res intellecta* が存在的に多なるものについて語られるということから普遍的であり、その意味で共通的といわれる、と述べられている。<sup>(9)</sup> Thomas は、この前者を因果性による共通的原理、後者を述語性による共通的原理として把握して自己の論理



にとりいれているのである。然るに、この述語性による共通的原理としては、上述の Met.  $A_4$  の、普遍的に、或いは類比的に語られる場合には同一であるといわれた原理をあてているが、因果性による共通原理としては、同所でそれに対して述べられている第一動者をあてることなく、存在の原理 principium essendi なる概念を導入してそれにあて、その説明を Met.  $\alpha_1$  に求めている。従って、Thomas 自身も、問題としている如く、第一動者たる離在的実体において存在一般の普遍的原理を見ることはできず、離在的実体に新しい内容を必要とし、それを Met.  $\alpha_1$  に求めたものと解される。

ところで、Met.  $\alpha_1$  は、 $\alpha$  巻というそれと与えられた記号からも推測される如く Metaphysica にはむしろ傍系的なるものであるが、Thomas はここにその最も重要な思想を見ているのである。すなわち、離在的実体の新しい内容は次の如くにしてえられている。先ず、Met.  $\alpha_1$  の、  
 「そのものが因となって、もろもろ他のものにもそれと同じくかくかくのものと呼ばれることが属するに至るところのものは皆、もろもろ他のものに比して最高度にかくかくのものである。例えば、火は最高度に熱きものであるが、それは、火がもろもろ他のものにとっても熱さの原因であるからである。」<sup>(10)</sup> と述べられているところから、  
 「何らかの領域において最高度にかくかくのものと呼ばれるところのものはその領域に属するところのあらゆるものの因をなす。」という、Thomas の神の存在の証明の第四の途における論拠ともいべき基本命題を把握する。そして、これにより、一般的に、あらゆる存在者にとってその存在の因であるところの最高度の存在者が存すべきことを認めさせ、更に、同じ章の、  
 「それゆえ、常に存在するものの原理は常に最も高度に真なるものでなくてはならぬ。なぜなら、それは、ある時には真であるというものではなく、また、それにとって何か存在の原因といったものが存することはなく、むしろ、それが他のものにとって存在の原因なのだから。」<sup>(11)</sup> と述べられているところか

ら、常に存在するもの、すなわち天体、は不可滅的なものであり乍ら、その運動の因を他に有するのみならず、その存在の因をも他に有するものなることが把握され<sup>(12)</sup>、この箇所を典拠として、Aristoteles の神が、天体にとって単に運動の因たるのみであって、天体の実体的存在の因たることを認めない人々の誤れることを指摘している<sup>(13)</sup>。

ここにおいて、Aristoteles の第一動者はそのまま Thomas のいうところの *maxime ens* となり、かくて、存在一般の共通の且つ普遍的な第一原理となりうる。と同時に、主題として考察すべき存在者も、神から *esse* を与えられることによって存在するもの、すなわち、*ens* は *esse habens* であるという Thomas 的な存在者となり、Met. E<sub>1</sub> に<sup>(14)</sup>、この学が事物の本質 *quidditas rei* を探究すべきことが述べられているのに対しても、〈なぜなら、すべての事物は自己の本質を通じて *esse* を有つから<sup>(15)</sup>〉であると解され、*Metaphysica* の中心的部分を構成する実体、本質の理論もそのまま Thomas の存在理論の下部構造をなすものとして把握される。かくして、*Metaphysica* は内容的にも Thomas の *theologia philosophica* として、神学的哲学的体系のうちに包摂されるものとなっている。

以上、Thomas が Aristoteles の *Metaphysica* を如何なるものとして把握したか、に関して検討され、一応の答えがえられたが、Met. α<sub>1</sub> において *maxime ens* を見ることによって成立するともいえるこの Thomas の *Metaphysica* 解釈が、歴史的に見られた Aristoteles の *Metaphysica* に対して如何に評価すべきか、という点に関しては更に別に論ぜらるべきことである。 一完一

## 註

- (1) 現存の *Metaphysica* は A-N 迄の 14 卷であるが当時は Met. A 迄しかラテン訳が存しなかったことから、Thomas の註釈も後の二卷の存在は知り乍ら A 卷で終っている。cf. *Expositio in Met. comm.* 2488, *De unitate intellectus contra Averroistas*; *Editio critica* by Leo W. Keeler, § 41, P. 27, n. 135; § 118.

- (2) Met. A<sub>2</sub>, 982b7~983a11
- (3) Met. Γ<sub>1</sub>, 1003a21—32; Met E<sub>1</sub>, 1025b3~18
- (4) Met. E<sub>1</sub>, 1026a10~18
- (5) Met. E<sub>1</sub> 1026a23~32
- (6) P. Natorp ; Thema und Disposition der aristotelischen Metaphysik. (Philosophische Monatshefte 24)
- (7) W. Jaeger : Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung, (1923)<sup>7</sup> H. von Arnim ; Die Entstehung der Gotteslehre des Aristoteles, (1931) P. Gohlke ; Die Entstehung der aristotelischen Prinzipienlehre, (1954), J. Owens ; The Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics, (1951), J. Zürcher ; Aristoteles' Werk und Geist. (1925) Max Wundt ; Untersuchungen zur Metaphysik des Aristoteles, (1953)
- (8) Met. E<sub>1</sub>, 1026a6~18
- (9) Paul Wyser : Thomas von Aquin In librum Boethii de Trinitate, Questiones Quinta et Sexta. (1948) P. 47, n. 1
- 00 Met.. α<sub>1</sub>, 993b24~26
- (11) Met. α<sub>1</sub>, 993b28~30
- (12) Expositio in Met. comm. 295
- (13) Expositio in Met. comm. 1164
- (14) Met. E<sub>1</sub>, 1025b9—10
- (15) Expositio in Met. comm. 1148